九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

デカルト哲学におけるプロト命題解釈の帰趨 ： 直観説と推論説の限界

住吉, 燦史郎
九州大学大学院人文科学府 ： 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/7158058

出版情報：哲学論文集. 59, pp.1-22, 2023-09-30. The Kyushu-daigaku Tetsugakukai
バージョン：
権利関係：

デカルト哲学におけるプロト命題解釈の帰趨

――直観説と推論説の限界――

住　吉　燦史郎

はじめに

十七世紀の哲学者ルネ・デカルト（René Descartes, 1596-1650）は、「もろもろの学問において堅固で朽ちることのないもの」（AT. VII, 17, 7-8）[1]を樹立するために「私」の存在も含むあらゆるものを疑い、この懐疑の果てにおいて、「私は思惟する、ゆえに私はある（je pense, donc je suis / ego cogito, ergo sum）」（AT. VI, 32, 19, VIII-1, 7, 8；以下「コギト命題」と呼称）と断言する。しかし、このコギト命題がどのようにして確証されるのかという問題に関しては、十七世紀より論争的であり続け、これまで多くの論者が解釈を試みてきた。ただし、第三節で後述する近年興りつつある潮流をいったん括弧に入れると、コギト命題に関する解釈は半世紀以上前より硬直している。すなわち、コギト命題にありうる解釈は伝統的に推論説と直観説と呼ばれる二つの解釈枠組みのどちらかのみである、という発想が先立つ五十年において支配的であった[2]。しかしながら、この古典的な二つの解釈は、どちらもデカルトが「私はある」を肯定するまでの過程を根本的なところで捉え損なっている。

本稿の目的は、その誤りを指摘することで従来の二者択一的な解釈枠組み自体を解体し、コギト命題解釈の際に求められる事柄を提示することである。この試みにおいては、「私はある」が肯定されるまでの過程がもっともよく描き出されている『省察』に「私は思惟する、ゆえに私はある」という記載がないこと、また、「私は思惟する」という言葉も存在しないことが、重要な役割を果たすだろう。

本稿は以下の流れで進む。第一節では、従来の二つの解釈を概観する。第二節では、デカルトの探究において不可欠な事柄を明らかにする。最後の第三節では、『省察』の文言をもとにコギト命題解釈の際に求められる事柄を検討する。

第一節　推論説と直観説

1―1．推論説：モードゥス・ポネンス的推論

本項では推論説の概要をその代表的な論者であるウィルソンの解釈にそくして確認していく。

ウィルソンは推論説の要点を一言でこうまとめる。「推論説の意図は、「私は存在する」を推論によって不可疑だと知られる真理として示すことであり、その不可疑性は「私は思惟する」の不可疑性から推論される」[3]。このようにウィルソンは、「エルゴ（ゆえに）」という接続詞を媒介に「コギト（私は思惟する）」から「スム（私はある）」が推論されるとする。しかしながら、この推論を成り立たせるには何らかの大前提が必要である。そのため彼女は、この推論の内部には何らかの大前提が省略されていると捉える[4]。けれども、彼女自身も指摘する通り、次に示すテクストでデカルトはコギト命題を三段論法的推論と捉えることを否定している[5]。『省察』「第二答弁」のテクストを引用しよう。

誰かが「この私は思惟する、ゆえに私はある、いうなら私は存在する」と言う場合、その人は、存在を思惟から三段論

法によって演繹するのではなくて、ものをあたかも（tanquam）自ずからに知られたものとして精神の単純な直観（simplici mentis intuitu）によって認知する［…］。存在するというのでないかぎりは思惟するということは起こりえない、と自分自身の内で経験するということから、その人は自らの存在を知了するのである。というのは、一般的な命題を特殊なものの認識からかたちづくるということ、それがわれわれの精神の本性であるからである。（AT. VII, 140, 20-141, 2）

このようにデカルトは三段論法によるコギト命題の把握を否定している。けれども、ウィルソンによれば、上記のテクストはあらゆる推論の排除を示してはいない。というのも、テクストの最後の一文にある「一般的な命題を特殊なものの認識からかたちづくる」という順序に沿った推論であれば、その推論はデカルトの思索に反しないはずだと、彼女は考えるからである。[6] そこでウィルソンは、「もし私が思惟するならば、私は存在する」というあくまで個別的な「私」だけにかぎられた大前提からコギト命題を推論するというモードゥス・ポネンス（modus ponens）的解釈を試みる。「モードゥス・ポネンスは推論の妥当な形式であり、「第二省察」でさまざまな仕方で語られた仮定的状況によって、さまざまな思惟作用（cogitatio）から「私は存在する」を推論することが適切なものとなる。それゆえ、コギト命題は三段論法ではないとデカルトが否定したことと、コギト命題を他の真理からの推論だと解釈することとは、直接には関わっていない」。[7] したがって、ウィルソンは、「私が思惟するならば、私は存在する」という「私」にかぎられた個別的な原理に、「私は思惟する」という不可疑な命題が与えられることによって、「私は存在する」が論理的に推論される、と考える。[8]

このように、ウィルソンをはじめとする推論説論者は、コギト命題をモードゥス・ポネンスと捉えることによって、デカルトのテクストとコギト命題の推論的解釈との整合性を図ってきた。[9] また彼らは、上記のテクストの「ものをあたかも自ずからに知られたものとして精神の単純な直観によって認知する」という箇所においても、次の二つの点から推論説と矛盾しないと主張する。すなわち、第一に、『精神指導の規則』第三、七、十一規則では段階的な推論的把握も全体としては直観さ

れることもありうると言われている。また第二に、上記の引用では「あたかも（tanquam）」という語が付されているが、実際に「精神の単純な直観によって」把握しているならばこの語は必要ない。したがって、推論説論者は、コギト命題は厳密には推論的操作によって把握されるけれども、その把握は直観と呼ばれるほど一挙に知られるためにデカルトは「あたかも」という語を付して「精神の単純な直観によって認知する」という表現を用いたのだ、と結論する。[10]

1－2．直観説：思惟と存在の必然的な関係

前項では推論説の解釈指針を概観した。この解釈に対する検討は後に行うとして、本項では伝統的な解釈のもう一方である直観説を代表的な論者であるゲルーの解釈にそくして確認していこう。

ゲルーによれば、コギト命題は推論的形式から離れた「事実の確証[11]」であり、「純粋に知性的な直観[12]」によって知られるものである。すなわち、先の推論説のようにコギト命題を何らかの大前提に基づいたコギトからスムへの推論と捉えるのではなく、コギトもスムも直観という作用のもとで一挙に受け取られるものだとするのである。とはいえゲルーは、コギト命題は、「私」が思惟する際に偶然的に「私」は存在する、というような単なる偶然的な事実の立言でもないと言う。つまり、「私が事実において思惟するならば、私は必然的に存在しなければならない[13]」とされるように、コギトとスムは必然的に結びついているとゲルーは主張するのである。[14]ではこの結びつきの必然性は何が担うのか。

コギトとスムの必然的結びつきを担保する方策として、ゲルーは「思惟するためには存在しなければならない」という格率を挙げる。この格率は三段論法の大前提としてコギト命題の前に確立されたものではなく、思惟と存在とが必然的かつ内在的に持つ関係を単に示したものである。すなわち、「線は直線なしに存在しうるが、その逆はありえない」、「もし直線が存在するならば、線は必然的に存在する」という関係と同じ関係が思惟と存在との間にもあり、「存在は思惟なしに知られうるとしても、思惟は存在なしには知られえない」、「もし思惟が存在するならば、必然的に存在がある」のである。[15]このことを

コギト命題にそくして言うならば次のようになる。つまり、「私は思惟する」という行為が事実においてなされているのであれば、そこから「私」は、思惟という概念の中に存在という概念が含まれていることを理解するために、思惟するという行為が成立するには必然的にその行為主体は存在している、すなわち「私は存在する」を論定するにいたる、と。このように、思惟と存在との必然的な関係は、恣意的な前提ではなく思惟と存在の概念からただちに導き出される関係であり、そのため、ひとたびコギトが直観されるや否や、思惟と存在とは必然的に結びついていることから、「私の思惟と私の存在との現実的な符合が確認されるのである」[16]。したがって、「思惟するためには存在しなければならない」という格率は、思惟と存在の概念の分析から自ずと知られ、「コギト命題の中には、互いに補完する必然性と事実とが不可分な仕方で結合しているが、この二つを分けることはできない」[17]のである。

このように、コギト命題は「思惟するためには存在しなければならない」という格率によって必然性を持つ。そしてこの格率は、コギト命題の前に独立に確証されるのではなく、あくまでも思惟と存在との内在的な関係として「コギト命題の中にある」[18]のだから、コギト命題はあくまで事実として直観され、この格率によって必然性が保証される、とゲルーは結論する[19]。

以上が、推論説と直観説の概要である。両解釈の要点を取り出すと、一方で推論説は、コギト命題に先立つ大前提を認め、コギト命題をその大前提からの推論と捉える解釈であり、他方で直観説は、「私」が事実において思惟するとき「私」は思惟という概念の中に存在するということが含まれていることに気づくため、その関係から自らが存在することを理解するという解釈である。ほとんどの場合、コギト命題解釈はこの二つの枠組みにもとづいて行われてきた。しかしながら、これらの解釈はどちらもコギト命題を解釈する際に前提としなければならない視点を欠いている。したがってまずは、デカルトにおいて、ある知見を確かな知として、すなわち探究に用いうる知として認識するために不可欠だと考えられている事柄を明ら

かにしよう。

第二節　探究の順序と個別具体的な思索経験

2－1．「一般的な知見」の位置

ある知見を探究に用いうる知として認識するためには何が必要なのか。本節ではそのことと関わる三つのテクストを確認する。最初に取り上げるのは、『哲学原理』Ⅰ部十項の一文（A）である（引用内の記号、傍点は著者による。以下同様）。

［A－1］したがって私は、「私は思惟する、ゆえに私はある」という命題が、あらゆる命題のうちで、順序正しく哲学している人の誰もが出会う最初の最も確実な命題であると言ったとき、［A－2］だからといって、この命題に先立って（ante ipsam）、「思惟とは何か」「存在とは何か」「確実性とは何か」とか、また同様に「思惟するものが存在しないことはありえない」[20]ことなどを、知っていてもおかしくない（scire oporteat）ことを否定しはしなかったが、［A－3］しかし、これらは最も単純な知見であり、またそれらだけでは存在しているものの知識を現前させないので、私はこれらを数えあげる必要はないと見なしたまでである。（AT. VIII-1, 8, 8-16）

最初に述べられるA－1において、デカルトは『哲学原理』Ⅰ部七項と同じように、コギト命題を「最初の最も確実な命題」と確言する[21]。ここで「最初の」という語が付されていることからして、コギト命題に先立つ確実な知はもとよりありえない。しかし、続くA－2のテクストから論者は、コギト命題の内部には何らかの前提ないし格率が成立していると解釈してきた。すなわち、一方で推論説論者は「もし私が思惟するならば、私は存在する」等の前提がコギト命題に先立って定立

していると、他方で直観説論者は「思惟」や「存在」という概念の定義から「思惟するためには存在しなければならない」という格率にデカルトは気づいていたと、A－2のテクストから解釈してきたのである。

しかしながら、このような解釈はどちらも上記十項のテクスト全体に流れる文脈を無視している。そもそもこの項の意図は、タイトルに示されているように、「最も単純でそれ自体で知られるものを、［スコラの］論理学によって定義しようとすると、かえって不明瞭に（obscuriora）される。そのようなものを研究によって受け取られる認識の中に数えあげてはならない」（AT. VIII-1, 8, art. 10 titre）と主張することにある。すなわち、デカルトは定義に基づくスコラ的な探究を「不明瞭[22]」な認識にいたらせる探究と捉える。このことは別のテクストでも強調されており、特に『真理の探求』では、「それら［＝懐疑、思惟、存在とは何か］を知るために、われわれの精神に暴力をふるい迫害を加えて、それらおのおのの最近類と種差とを見つけだし、この両者から真なる定義を合成する必要がある、などとは考えてはならない」（AT. X, 523, 25-28）と言われる。このように、デカルトは定義だけに基づく探究の途には進まない。したがって、たとえスコラの学者たちの探究の順序では、これらの知見すなわち後で見る三つ目のテクスト（C）で言われる「一般的な知見」を「知っていてもおかしくない」としても、デカルトの力点はむしろ、そういう認識を「数えあげる必要はない」とするA－3にある。つまり、コギト命題を確立する際にそれらはまったく用いられていないのである。

以上より、A－2はスコラ的な探究の順序に対する一種の譲歩的表現なのであり、それとは別の順序を歩むことをA－3が告げている。では、デカルトはどのような順序に基づいて或る認識を確かな知として受け入れるのか。ポイントになるのは、「それら［＝最も単純な知見］だけでは存在しているものの知識を現前させない」というA－3の一節である。この一節の意味を明らかにするため、補助となるテクストを二つ見ていこう。

2－2．知の成立条件

次に引用するのは、『哲学原理』Ⅰ部四九項のテクスト（B）である。

［B－1］この類に属するもの［＝共通の知見あるいは公理］としては、「同じものが同時に存在し、かつ存在しないことは不可能である」とか、「いったん起こったことは、起こらなかったことではありえない」とか、「思惟するものは、それが思惟する間、存在しないことはできない」[23]とかなど、他にも無数にあり、たしかにそれらをすべて列挙することは容易にはできない。［B－2］しかし、それらについて考える機会が生じ、いかなる先入見によっても盲目にされていない場合、それらは必ずや知られることになる。（AT. VIII-1, 24, 1-6. 強調は著者による）

B－1にあるように、「思惟するためには存在しなければならない」等の原型となるような共通の知見つまり「一般的な知見」は無数にあるが、上記四九項のタイトルでは、「永遠的な真理はこのように数えあげられないが、しかしその必要はない」と言われる。このように、「一般的な知見」に対する扱いはAのテクストと変わらず、数えあげる必要はないものとされる。そして、B－2ではAのテクストとは反対に、この知見が知られる条件について言及される。すなわち、それらが知られるのは、「それらについて考える機会が生じ、いかなる先入見によっても盲目にされていない場合」においてなのである。「一般的な知見」は、感覚や想像さらには「両親や教師や他の人たち」（AT. V, 146, 6）から教えられてきた先入見を排除するだけでなく、実際に考え吟味することによってはじめて、確かな知として認識される。他の箇所でも、「精神は、これらの共通的な知見に注意している間は、それらの証明が真であることをまったく確信する」（AT. VIII-1, 9, 21-22）、「その命題［＝思惟するものは在る］を探究している間、それが先入見であるとは言いえない」（AT. IX-1, 205, 20-21）と言われるように、「注意」し「探究」するという実際の吟味が、「一般的な知見」を確かな知として認識する条件となっているのである。逆から言え

ば、「これらのもの［＝懐疑や思惟や存在］については、われわれ自身の経験や、各人がそれらを吟味する（perpendit）ときにみずからのうちに見いだすところの、意識すなわち内的証言によってでなければ、納得することができない」（AT. X, 524, 13-17）のである。したがって、デカルトにおいて、知をいわば探究に用いうる真の知として受け入れるためには、それを具体的な場面で実地にためして吟味することが必要なのである。このことは次のテクスト（C）でよりはっきりと示されているため、その検討へと移ることにしよう。

2－3．個別具体的な思索経験

次に引用するのは、『ビュルマンとの対話』の中にある、『哲学原理』Ⅰ部十項（Aのテクスト）に対して投げかけられた質問にデカルトが応答した箇所（C）である。

［C－1］「私は思惟する、ゆえに私はある」という結論に先立って、「思惟するものはすべてある」という大前提を知ることができる。なぜなら、事象そのものに即するならば、この前提は私の結論より前にあり、私の結論はそれに基づくからである。こういうわけで、『哲学原理』で著者は、この大前提が先立つとしている。なぜなら、潜在的には（implicite）いつでもそれが前提されており、先立っているからである。［C－2］しかしだからといって、いつでもはっきりと顕在的に（expresse et explicite）それが先立つことを私が認知したり、自分の結論より先に知ったりするわけではない。［C－3］なぜなら、「私は思惟する、ゆえに私はある」というように、私は私自身の内で経験するものにだけ私は注意を向けている（tantum attendo quod in me experior）のであって、そのように「思惟するものはすべてある」という一般的な知見に注意を向けてはいないからである。というのも、すでに述べたように、私たちはこれらの命題を個別的なものから切り離さず、個別的なものの中で考えているからである。（AT. V, 147, 9-18. 強調は著者による）

これまでと同じく、デカルトはC－1において「一般的な知見」の成立を認めながらも、C－2でそれはコギト命題に先立って認知されているわけではないと述べる。その理由は、たしかに多くの論者が指摘しているように、「一般的な知見」が「潜在的」であり「顕在的」ではないからである。しかしそれ以上に、C－3で語られている事柄がより根本的な理由となる。すなわち、「私は私自身の内で経験するものにだけ私は注意を向けている」こと、また、「個別的なものの中で考えている」ことが、コギト命題が「一般的な知見」に先立って知られる直接の理由となっている。そして、このことはこれまでの考察と重なる。なぜなら、先で示したように、デカルトは具体的な場面で実地にためして吟味したものだけを確かな知として認識するのであり、この吟味がここでは、個別的なものを「私自身のうちで経験する」ことと言い換えられているからである。このように、実際の吟味が、より厳密には個別具体的な思索経験が、ある認識を探究に用いうる知として受け入れる条件となる。「懐疑とは何か、思惟とは何かを認知するためには、疑ったり思惟したりするだけで十分なのである」（AT. X, 524, 19-21）と言われるように、デカルトにとっては実際に経験することが不可欠なのである。

以上を踏まえると、われわれがポイントとして残してきた、「それら［＝最も単純な知見］だけでは存在しているものの知識を現前させない」というA－3の一節はこう解釈されるべきだろう。すなわち、この一節でデカルトは、どのような知見であっても思索経験の実質を欠いているならば、たとえそれが論理的には確実だとしても、実際に存在しているものの知識を現前させないために確実な認識として数えあげてはならない、としたのである。このように、個別具体的な思索経験によって裏打ちすることが何よりもまず不可欠な条件なのであり、デカルトは、論理的に確実か否かという観点ではなく、実際に個別的に吟味したという経験があるか否かという観点に基づいて思索を進めているのである。

第三節　推論説と直観説を超えて――懐疑経験の重要性

3―1．コギト命題とプロト命題

前節で明らかにしたように、デカルトは個別具体的に経験した認識のみを自身の探究に用いる知として受け入れる。しかし、このような主張に対してはこう反論されるかもしれない。「私は思惟する、ゆえに私はある」というコギト命題だけを見るかぎり、個別具体的な経験は見出されないし、その必要はない、と。実際、第一節で概観した推論説ないし直観説では、個別具体的な経験に言及することなく、むしろ一般的な仕方で「コギト（私は思惟する）」から「スム（私はある）」を確証する方途が探究されていた。すなわち、たしかにコギトだけではスムの肯定の根拠にはならないが、コギト命題の前には何らかの大前提が措定されるために、その大前提とコギトからモードゥス・ポネンスによってスムは結論される［＝推論説］と、あるいは、「思惟するためには存在しなければならない」という格率が思惟と存在との間に成り立っているために、コギトが成立するかぎり必然的にスムは真となる［＝直観説］と、解釈されてきた。このように、解釈方針に関する違いはあれども、推論説と直観説はともにコギトを経験性の含まれない端的な命題と捉える。言い換えれば、両解釈におけるコギトは、思惟ならば何でもよいという仕方で捉えられた無規定的・無内容的な思惟であり、具体的・個別的な思惟である必要はないのである。しかしながら、ここにこそ、推論説と直観説のどちらもが陥っている根本的な誤りがある。

コギトとスムという二項だけを発想の前提に据える従来の解釈はどれも、『方法序説』や『哲学原理』での「私は思惟する、ゆえに私はある」というコギト命題にしか着目せずに解釈を展開する。しかし、『哲学原理』の仏訳にふされた序文で、「形而上学の基礎を認識する際に多くの人が抱く困難を見越し、私は『省察』にて形而上学の主要な点を説明しようと試みた。［…］『哲学原理』Ⅰ部を理解するためには、それと同じ主題［＝第一哲学と形而上学］について書いた『省察』をあらかじ

め読むとよい」（AT. IX-2, 16, 2-18）と言われるように、「私はある」という肯定の根拠はむしろ『省察』にこそ見出されなければならない。[24] そして、コギト命題の発出源をなし、「私はある」が肯定されるまでの過程がもっとも鮮明に描かれている『省察』ではこう言われる。

> かくして、すべてを十分にも十二分にも熟考した今、「私はある、私は存在する（ego sum, ego existo）」というこの言明は、私によって言表されるたびごとに、あるいは精神によって抱懷されるたびごとに、必然的に真であると最終的に論定されなければならない。（AT. VII, 25, 10-13）

ここには、いわばそれ単独で成立するような「私は思惟する」という命題は存在しない。では、「私はある」という肯定は何に基づいているのか。着目すべきことは、この肯定には、「かくして」を繋ぎ目に、「すべてを十分にも十二分にも熟考した今」という事柄が結びつけられていることである。この「すべてを十分にも十二分にも熟考した今」は、まさに「第一省察」から続く懐疑の経験を含んだ今の状況を意味する。デカルトは、この状況を契機に、言い換えればこの経験を梃子に、「私はある」を肯定しているのである。したがって、『省察』がはっきりと示しているように、「私はある」という肯定は、コギトという一語ではむしろ集約できない、先立つ省察経験全体によって支えられていると捉えられなければならない。

以上のように、上記の『省察』の一文は個別具体的な思索経験を前提にしている。そして、この一文はコギト命題の発出源をなすのだから、「私はある」は、デカルト哲学全体を通じて、先立つ省察経験に基づいて知られるとされなければならないだろう。この視点はコギト命題だけを探究の対象に掲げた場合には見えてこないものであり、それゆえに従来の論者はこの視点を欠いていた。そして、この視点が欠如している中で解釈を展開したこれまでの解釈は、次の根本的な誤りに陥ることになる。

先で示したように「もし私が思惟するならば、私は存在する」や「思惟するためには存在しなければならない」という「一般的な知見」は、個別具体的な経験によって充填されることで探究の俎上にあげられる知として認識される。そして、この経験とは「私」の存在に関する経験なのだから、デカルト哲学の順序に沿うかぎり、これらの「一般的な知見」は「私はある」と肯定された後でしか言及されえない。それゆえに、「私はある」の肯定に不可欠な「経験」という事柄を無視し、何らかの「一般的な知見」に依拠する推論説や直観説は、デカルト哲学の解釈として誤っていると言わざるをえないのである。[25] では、われわれはどのような解釈を試みるべきか。『省察』にあらわれている経験という事柄を埋もれさせないよう、上記の『省察』の一文をコギト命題と区別するために「プロト命題」と呼び、以下でプロト命題に焦点を合わせた方途を検討しよう。[26]

3－2．近年興りつつある潮流

「私はある」が肯定されるまでの過程を明らかにするためには、先立つ経験に着目しなければならない。では、具体的にはどのような経験によってデカルトは「私はある」を肯定するにいたったのか。この問いの補助となる考えを推論説や直観説の考えから取り出すことは原理上不可能であろう。しかしながら、これまでの論者の中においても、実質的にはプロト命題に――したがって経験性に――目を向けていた者たちがいる。以下、それを見ていこう。なお、彼らもあくまで通例となっている「コギト命題」という呼称を用いているが、実質的には『省察』の「プロト命題」を指し、プロト命題だけを議論の対象としている場面がある。そのことが明確な場合は適宜括弧で言い換えた。

例えば、「デカルトの方法は論理というよりも精神の教育法であり、懐疑は練習というよりも修行である」[27]と捉えるグイエは、「懐疑は存在を露見するための装置である」[28]とする。また、「「第二省察」のコギト命題［＝プロト命題］は最初から「私は存在する」である」[29]と捉えるアルキエは、「デカルトは懐疑から存在を直接提示し、その後に初めてその存在は何かと問うの

である」[30]とする。このようにこの種の論者は、プロト命題を解釈するにあたり、「第一省察」で展開されたデカルトのいわゆる方法的懐疑に着目する。とはいえ、もちろん第一節で取り上げた論者もみなコギト命題解釈に先立って懐疑に触れており、その重要性を指摘している。しかしそれでも、推論説や直観説論者と上に例示したグイエやアルキエらとは、その懐疑の扱い方において根本的に異なっている。そのことをポプキンはこう明示している。「懐疑の方法は認識の獲得のきっかけ（occasion）というよりも原因（cause）である」[31]。すなわち、推論説や直観説にとって懐疑の行程は、「私はある」の不可疑性を確証してくれるという点を除けば、必要不可欠なものではない。事実、第一節では懐疑の事柄に言及することなく、彼らの解釈をまとめることができた。それに対し、ここで取り上げている論者は、まさに「懐疑は存在を露見するための装置である」とする。すなわち、この者たちは、村上の言葉を借りれば、「疑いの道の重さ」を勘案し、懐疑からプロト命題を捉えようとしたのである[32]。

懐疑に着目するというこの解釈方針は近年再度注目されつつある。マリオンは二〇二一年に上梓した『デカルトの問題Ⅲ（*Questions Cartésiennes III*）』第一章で懐疑の働きの解明を試み、その結論部分で「存在は懐疑から直接やって来る」と述べる[33]。カンブシュネルも、二〇〇九年に提出した論文の中で、「コギト命題［＝プロト命題］の現象学を構成するというのは、デカルトが描き出した状況に全神経を注ぐことである。そしてそれは、その状況を構成する諸条件（誇張的懐疑、つまりあらゆる確実性やあらゆる外的な目印の一時的な喪失）を真剣に捉えることによって、［…］なされる」と述べる[34]。また、十七世紀当時のコギト命題に向けられた諸々の批判を整理したアリューは、それらの批判は「多少の違いはあれど、懐疑に関するデカルトの方法を完全に無視している」[35]と総括する。そして、この分析を通じてアリューは、「懐疑という方法がなければ、コギト命題［＝プロト命題］は推論、それも凡庸な推論以外の何ものでもありえない」、「懐疑という方法とコギト命題［＝プロト命題］は、同じ運命を持っているように見える。懐疑を否定する十七世紀のスコラ学者たちはコギト命題［＝プロト命題］も共に否定する」[36]と述べ、逆説的に懐疑がプロト命題解釈に寄与することを示唆する。このように、プロト命題の解明に際し

て懐疑に着目するという方途はいまだ消えてもいなければ、むしろ近年積極的に注目されつつある。したがって、広く言えば十七世紀から現代まで続いてきた解釈動向から一歩前進するのは、懐疑経験をまさにプロト命題の根拠とすることであるようにわれわれには思われるのである。

3－3．結びに代えて――探究の向かう先

従来の解釈は「私は思惟する、ゆえに私はある」というコギト命題だけに着目した解釈であり、思惟ならば何でもよいという仕方での無規定的・無内容的な「私は思惟する」から一般的に「私はある」を見出す方途を模索してきた。しかし、これまでの議論から明らかなように、プロト命題の解釈には、個別具体的な経験の側面を考慮に入れることが不可欠である。そして前項より、中でも懐疑経験に着目することがこの解釈の中核を担うだろう。とはいえ、前項で挙げた論者においても、どのような意味で懐疑経験が重要なのかは明確にされておらず、事実、懐疑経験に基づいた仕方で「私はある」が肯定されるまでの過程を具体的に提示した解釈はいまだ存在しない。われわれは何を考えるべきなのか。残る紙幅ではこれ以上の検討を行うことはできないため、これから向かう先のポイントの指摘をもって本稿の結びに代えることにしよう。

プロト命題は懐疑経験の中で見出されると捉える場合、ポイントとなるのは次の二つである。第一に、「第一省察」の示す道程をデカルトとともに辿る省察者は、懐疑の果てにおいて、「確実なものは何もない（nihil esse certi）」（AT. VII, 24, 18）と断言する直前の状況にある。また第二に、「暗闇」（AT. VII, 23, 18）とも「深く渦巻いた水」（AT. VII, 24, 1）とも表現されるこの地点で、省察者は「それゆえ、私もない（me non esse）のではないか」（AT. VII, 25, 4-5）と思考するよう求められる。そして、この二つ目の点がポイントとなるとき、次なる梃子として考えるべきは、「はじめに」の註2で予告したように、ヒンティッカの行為遂行説であろう。というのも、ヒンティッカの行為遂行説では、「私は存在しない」と言表することが「私はある」という肯定の重要な契機とされているからである。行為遂行説は半世紀以上前に提出された考えであり、すでに多

くの論者によって議論されているが、今なお顧みられず残されている重要な視点がここにはある。したがって、行為遂行説の検討を次なる梃子として、懐疑経験が「私はある」という肯定にどう結びつくかを明らかにすることがこれからの課題となる。とはいえ、解釈史の動向の整理と新たな解釈の可能性を示すことができたならば、本稿の目的は達成されたと言えるだろう。

参考文献

Ferdinand Alquié, *La découverte métaphysique de l'homme chez Descartes*, P.U.F., 1950.

Roger Ariew, « Critiques scolastiques de Descartes : le *cogito* », in *Laval théologique et philosophique*, vol. 53, n° 3, Érudit, 1997, pp. 587-603.

Étienne Balibar, *Citoyen sujet et autres essais d'anthropologie philosophique*, P.U.F., 2011.

Leslie J. Beck, *The metaphysics of Descartes : a study of the Meditations*, Clarendon Press, 1965.

Jean-Marie Beyssade, *La philosophie première de Descartes*, Flammarion, 1979.

Vincent Carraud, « Nihil esse certi, point à la ligne ? », in *Les Études philosophiques*, n° 96, P.U.F., 2011, pp. 61-69.

———, « Première Méditation », in *Les Méditations métaphysiques, objections et réponses de Descartes : un commentaire*, éd. Dan Arbib, J. Vrin, 2019, pp. 71-88.

Edwin M. Curley, *Descartes against the skeptics*, Harvard University Press, 1978.

René Descartes, *Œuvres de Descartes*, éd. Charles Adam et Paul Tannery（AT）, nouvelle présentation, 11vol., J. Vrin, 1996.

———三宅徳嘉他訳『デカルト著作集（増補版）』白水社，全四巻，一九九三年．

Harry G. Frankfurt, "Descartes's Discussion of his Existence in the Second Meditation", in *The Philosophical Review*, Vol. 75, No. 3, Duke University Press, 1966, pp. 329-356.

Henri Gouhier, *La pensée métaphysique de Descartes*, J. Vrin, 1962.

———*Descartes : essais sur le « Discours de la méthode », la métaphysique et la morale*, 3e éd., J. Vrin, 1973.
———中村雄二郎／原田佳彦訳『人間デカルト』白水社，一九八一年.
Martial Gueroult, *Descartes selon l'ordre des raisons*, 2 vol., Aubier, 1953.
Jaakko Hintikka, "Cogito, Ergo Sum: Inference or Performance?", in *The Philosophical Review*, Vol. 71, No. 1, Duke University Press, 1962, pp. 3-32.
———小沢明也訳「コギト・エルゴ・スムは推論か行為遂行か」，デカルト研究会編『現代デカルト論集Ⅱ英米篇』勁草書房，一九九六年，十一－五三頁.
Denis Kambouchner, « Identification d'une pensée : le *Cogito* de Hintikka », in *Revue internationale de philosophie*, n° 250, De Boeck Supérieur, 2009, pp. 405-422.
———*Descartes n'a pas dit*, Les Belles Lettres, 2015.
———津崎良典訳『デカルトはそんなこと言ってない』晶文社，二〇二一年.
———« Le *Cogito* en perspective : histoire, philologie, phénoménologie », in *Les formes historiques du Cogito, XVIIe-XXe siècles*, éd. K. S. Ong-Van-Cung, Garnier, 2019, pp. 51-66.
Anthony Kenny, *Descartes : a study of his philosophy*, Facsimile of 1968 ed., St. Augustine's Press, 2009.
Jean-Luc Marion, *Sur la théologie blanche de Descartes*, 2e éd., P.U.F., 1991.
———« Méditation seconde », in *Les Méditations métaphysiques, objections et réponses de Descartes : un commentaire*, éd. Dan Arbib, J. Vrin, 2019, pp. 89-106.
———*Questions Cartésiennes III*, J. Vrin, 2021.
Édouard Mehl, « La question du premier principe dans *La Recherche de la Vérité* », in *Nouvelles de la République des Lettres*, n° 1, Prismi, 1999, pp. 77-97.
———« *Dubito ergo sum* : Descartes et le *cogito* des cartésiens », in *La Lettre clandestine*, n° 10, Garnier, 2001, pp. 43-58.
村上勝三『デカルト形而上学の成立』第二版，講談社，二〇一二年.

Lawrence Nolan ed., *The Cambridge Descartes lexicon*, Cambridge University Press, 2016.
Jean-Claude Pariente, « Problèmes logiques du Cogito », in *Le Discours et sa méthode*, P.U.F., 1987, pp. 229-269.
Richard H. Popkin, *The history of scepticism from Savonarola to Bayle*, revised and expanded ed., Oxford University Press, 2003.
———野田又夫／岩坪紹夫訳『懐疑：近世哲学の源流』紀伊國屋書店，一九八一年.
Geneviève Rodis-Lewis, *L'œuvre de Descartes*, 2 vol., J. Vrin, 1971.
———小林道夫／川添信介訳『デカルトの著作と体系』紀伊國屋書店，一九九〇年.
所雄章編『デカルト『省察』の（共同作業による）批判的註解とその基本的諸テーマの問題論的研究』昭和六〇年度科学研究費（総合研究A）研究成果報告書，一九八六年.
所雄章『デカルト『省察』訳解』岩波書店，二〇〇四年.
Margaret D. Wilson, *Descartes*, Routledge & Kegan Paul, 1978.

註

（1）デカルトのテクストの引用は、*Œuvres de Descartes*, éd. C. Adam et P. Tannery（AT）, nouvelle présentation, 11vol., J. Vrin, 1996から行い、ATの略号に続けて巻数、頁数、行数の順に本文中に示した。日本語訳については三宅徳嘉他訳『デカルト著作集（増補版）』全四巻，一九九三年を参考にしたが、一部変更した箇所もある。

（2）Cf. 所雄章編「デカルト『省察』の（共同作業による）批判的註解とその基本的諸テーマの問題論的研究」一九八六年，八四－九五頁；L. Nolan ed., *The Cambridge Descartes lexicon*, 2016, pp. 128-135.
なお、解釈史には推論説とも直観説とも異なりながらも有力な第三の解釈として、ヒンティッカの行為遂行説がある（J. Hintikka, "Cogito, Ergo Sum: Inference or Performance?", 1962, pp. 3-32）。そして、第三節で後述するように、行為遂行説には着目するべき重要な議論がある。しかし、その行為遂行説を検討するためには、それに先立ち推論説と直観説の検討が必要である。それゆえ、

本稿では行為遂行説まで取り扱わない。

（3）M. D. Wilson, *Descartes*, 1978, p. 53.

（4）*Ibid.*, p. 54.

（5）*Ibid.*, pp. 54-55.

（6）*Ibid.*, p. 56.

（7）*Ibid.*

（8）*Ibid.*, pp. 56-57.

（9）Cf. E. M. Curley, *Descartes against the skeptics*, 1978, p. 80.

（10）A. Kenny, *Descartes : a study of his philosophy*, Facsimile of 1968 ed., 2009, pp. 53-55. Cf. H. G. Frankfurt, “Descartes's Discussion of his Existence in the Second Meditation”, 1966, p. 338.

（11）M. Gueroult, *Descartes selon l'ordre des raisons*, tom. II, 1953, p. 308.

（12）M. Gueroult, *op. cit.*, tom. I, pp. 58-59.

（13）M. Gueroult, *op. cit.*, tom. II, p. 309. 強調は原著者による。

（14）*Ibid.*

（15）*Ibid.*, pp. 309-310.

（16）*Ibid.*, p. 310.

（17）*Ibid.*

（18）*Ibid.*

（19）この種の解釈を採る者としては他にベックやロディス−レヴィス、ベサッドなどが挙げられる（L. J. Beck, *The metaphysics of Descartes : a study of the Meditations*, 1965 ; G. Rodis-Lewis, *L'œuvre de Descartes*, 1971 ; J.-M. Beyssade, *La philosophie première de Descartes*, 1979）。ただし、ベサッドは時間性という側面をコギト命題解釈に含めるが、本稿には関わらないため、この点は措いておく。

（20）一六四七年のリュイヌ公による仏訳では「思惟するためには存在しなければならない」とされている（AT. IX-2, 29, 9-10）。

(21) 七項ではこう言われる。「したがって、「私は思惟する、ゆえに私はある」というこの認識は、あらゆる認識のうちで、順序正しく哲学している人の誰もが出会う最初の最も確実な認識である」(AT. VIII-1, 7, 7-9)。

(22) 「不明瞭（obscure）」という言葉は、「不分明（confuse）」という言葉と合わせて、「明晰かつ判明」と対置されている言葉である。Cf. 所雄章『デカルト『省察』訳解』二〇〇四年、二三三四－二三五頁.

(23) この知見は「思惟するためには存在しなければならない」という格率の「より発展した定式」であり、ゲルーの中で両者は同一視されている、とパリアントは指摘する（J.-C. Pariente, « Problèmes logiques du Cogito », 1987, p. 248）。

(24) Cf.「「第二省察」の注釈者たちは、『方法序説』や『哲学原理』との単純化した比較によって十九世紀初頭からコギト命題と呼ばれてきたものを対象とするとき、通常 AT. VII, 24, 19-25, 13 だけを、すなわち直接的な文脈から切り取られた断片である一節の議論を再構成しようする」(V. Carraud, « Nihil esse certi, point à la ligne ? », 2011, p. 61)。

(25) この点に関してカンブシュネルとメールは、われわれと同じく、次のように分析している。「自分の思考に向けられる認識に先立つべき一般的認識はここには存在しない。それどころかデカルトによれば、「一般的な命題を特殊なものの認識から形造るということ、それが私たちの精神の本性である［= AT. VII, 140, 28-141, 2］」。経験が先に来るのである」(D. Kambouchner, *Descartes n'a pas dit*, 2015, pp. 65-66)、「コギト命題が一般的な格率を前提しているのではなく、実際はこの格率こそが、見られること、思惟されること、行為遂行されることを前提しているのである」(É. Mehl, « La question du premier principe dans *La Recherche de la Vérité* », 1999, p. 81)。特に、マリオンは、われわれが言及した『哲学原理』I部十項と『ビュルマンとの対話』の一節に触れつつ、「しかしこの論理的な先行は、コギト命題という結論それ自体がすでに現れた後にしか現れない」、「コギト命題は、論理的な前提は許しても、それらに基づいているわけではない」(J.-L. Marion, *Sur la théologie blanche de Descartes*, 2e éd., 1991, pp. 374-375）と述べる。Cf. J.-L. Marion, « Méditation seconde », 2019, p. 105.

(26) コギト命題とプロト命題との違いに言及する論者はたしかに多いが、そのほとんどはこの違いを表現上の差異と捉え両者を同一視している。とはいえ、われわれと同じくこの違いが解釈上の要点となると考えている論者も、少ないながらも存在する。例えば、バリバールは「『省察』の言明は単に「私はある、私は存在する」だけであり、ここでは「思惟すること（cogitare）」や「思惟（cogitatio）」を内的に媒介した参照は何も現れない。それゆえ、『省察』の言明をコギト命題ないしコギト命題の真理と称す

るのは、どう見積もっても一つの解釈である」（É. Balibar, *Citoyen sujet et autres essais d'anthropologie philosophique*, 2011, p. 89）と、カンブシュネルは「最初には異なる形式の下で現れた一つの知的操作やその操作の結果を、後になってから要約された形で指し示すために、デカルトの筆の下ではコギト命題という定式が仲立しているのだ」（D. Kambouchner, « Identification d'une pensée : le *Cogito* de Hintikka », 2009, p. 412）と述べている。Cf. J.-L. Marion, *Questions Cartésiennes III*, 2021, pp. 58-59.

(27) H. Gouhier, *Descartes : essais sur le « Discours de la méthode », la métaphysique et la morale*, 3e éd., 1973, p. 116.

(28) H. Gouhier, *La pensée métaphysique de Descartes*, 1962, p. 269.

(29) F. Alquié, *La découverte métaphysique de l'homme chez Descartes*, 1950, p. 151.

(30) *Ibid.*, p. 185.

(31) R. H. Popkin, *The history of scepticism from Savonarola to Bayle*, revised and expanded ed., 2003, p. 152.

(32) 村上とキャローはそれぞれ、「「直証説［＝直観説］」と「推論説」という対立のもとで「私はあり、私は実在する」という言明の意義を捉えようとすることには反対である。そのように論を立てる場合に、どうしても疑いの道の重さが軽減されることになるからである」（村上勝三『デカルト形而上学の成立』第二版、二〇一二年、二三二頁）、「懐疑論と戦うという任務の中でデカルトが初めてその価値を弱めようとした議論がどれだけ暫定的で――そして危険で――あろうとも、必要であると同時に一時的であるこの最初の瞬間は、それでもやはりそれ自体で価値を持つ。――デカルトより後世の偉大な人々がみなこれを拒絶するとしても」（V. Carraud, « Première Méditation », 2019, p. 72）と述べ、懐疑を無視したプロト命題解釈を展開することの危険性を示唆する。

(33) J.-L. Marion, *Questions Cartésiennes III*, 2021, p. 54. Cf. AT. X, 515, 21-22.

(34) D. Kambouchner, « Identification d'une pensée : le *Cogito* de Hintikka », 2009, p. 419.
なお、カンブシュネルは二〇一九年の論文でも、一部にまったく同じ表現を用いながら同様のことを主張している（D. Kambouchner, « Le *Cogito* en perspective : histoire, philologie, phénoménologie », 2019, p. 62）。

(35) R. Ariew, « Critiques scolastiques de Descartes : le *cogito* », 1997, p. 601.
また、メールもアリューと同じく十七世紀当時におけるプロト命題に対する議論を整理し、懐疑の重要性を唱える（É. Mehl, «

Dubito ergo sum : Descartes et le *cogito* des cartésiens », 2001, pp. 44-50)。

(36) R. Ariew, *op. cit.*, 1997, p. 602.

※本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2136 の支援を受けたものです。

（九州大学大学院人文科学府・博士後期課程）